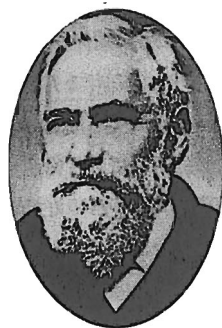


の結果を発表した。その後ベルリンの衛生局に5カ月在学した。その時予定の留学期間は満ちたが、内務省より更に一カ年の学資を支給され、再度ミュンヘン大学に赴いた。1884年（明治17）3月には同大学の官仕助手に挙げられ、アルコール類の胃中消化に及ぼす作用を研究し、その成果を発表後同年12月に帰国した。それは森鷗外がドイツ留学に出発した2カ月後のことである。

## 緒方正規とペッテンコーフェル

衛生学の大家で、ミュンヘン大学に近代の実験科学としての衛生学を築き、その教授となったマックス・フォン・ペッテンコーフェル（1818-1901）は高齢のため来日はしなかったが、明治の医学生にとって神の如き存在であり、その教え受けに留学した者も少なくなかった。その中では森鷗外が最も有名であるが、ほかに中浜東一郎や小池正直、坪井次郎などもいた。ペッテンコーフェルの教え子たちは日本に帰ってから折に触れて集まり、ミュンヘンでの留学生活や師の思い出を語り合った。例えば、中浜東一郎は1892年（明治25）1月元旦東京から新年の挨拶を師に送り「先生のかつての日本の教え子たちは皆元気で、有能です」と述べている。



ペッテンコーフェル

だが、ペッテンコーフェルの最初の弟子で、師から最も愛されたのは緒方正規である。鷗外がミュンヘン市の宮廷街1番地の Hof-Apotheke 内にあったペッテンコーフェルの自宅を最初に訪ねたのは1886年（明治19）3月9日であるが、その時師から「君もかつて自分が愛した日本人学生緒方正規のようになってもらいたい」と激励されたという（『独逸日記』）

緒方は明治13年東大医学部を卒業後、生理、衛生の2科の研究のため文部省より派遣されドイツに留学した。最初ライプツィヒ大学でペッテンコーフェルの教え子であるホーフマン教授と、ルートヴィッヒ教授について生理学と衛生学を2年半学んだ後、ミュンヘンに転学した。そして衛生学研究所においてペッテンコーフェルに就いて、亜硫酸ガスの人体に及ぼす有害性についての実験を行い、その論文（Ueber die Giftigkeit der schwefligen Säure）を衛生学アルヒーフ誌 Archiv für Hygiene 第2巻（1884）に発表した。これを読んだ師は、緒方の自叙伝（『衛生学伝染病学雑誌』第15巻2号、大正8年）によると、

「貴君ハ僅ニ半年ニシテ実ニ興味アル學術上ノ研究ヲナセリ、若シ日本政府ニシテ貴君ノ留学期限ヲ延長スルアラバ君ヲシテミュンヘン衛生学助手ヲ拝命セシムベシ」

と述べたという。それで緒方はベルリンに行き、青木周蔵公使に師の書面を見せて、文部省に留学延期を依頼したが許可されなかった。そこでベルリンの衛生院（ゲストハイトアムト）でしばらく細菌学を学び、明治17年1月帰途に就きパリに赴いた時、内務省より更に1年間留学を延期せよとの命を受け、再びミュンヘンに赴き衛生学研究所の助手となった。今度はアルコール等嗜好品の胃の消化に及ぼす作用について実験し、論文（Über den Einfluß der

Genußmittel auf die Magenverdauung) を衛生学アルヒーフ誌第3巻(1885)に発表した。

1884年(明治17)12月帰国。東京大学御用係を経て明治19年には医科大学の最初の衛生学教授に就任した。ペスト菌の研究で有名になって、翌年医学博士の学位を受けた。彼は実に日本における細菌学の創始者である。

さて緒方は明治30年露国モスクワにおける万国医学会に参列、帰途ドイツ各地の大学を訪問し、ミュンヘンで旧師に13年振りに再会した。ペッテンコーフェルは大変喜び、ミュンヘン大学の医学部の諸教授、即ち内科学の大家チームセン、ボリンケル、パウエル、ブフネル、エメリッヒ等、ナイトハルト軍医正その他多数の博士を招いて緒方のために歓迎会を開催した。それに緒方は大変感激した。

ミュンヘンのバイエルン州国立図書館にはペッテンコーフェルに宛てた明治の医学生達の書簡が保管されている。但し残念ながらそれらはまだ活字化されていない。その中で緒方のものが多数を占めており、二人の特別な親密さを窺わせる。緒方にとって師は単に「非常に尊敬する枢密顧問官殿」(der hochverehrte Herr Geheimer Rat) 以上の存在であり、彼は師のことを「父」(Vater)とも呼んでおり、衛生学研究所の助手達を兄弟達(Brüder)と称しているのである。日本人医学生達との往復書簡はペッテンコーフェルが1901年(明治34)に自殺で亡くなるまで続き、大抵その中で自分たちの研究について報告し、コレラの発生についても師に助言や方策を請い求めている。緒方は特に当時まだ原因が分からなかった脚気について報告した。彼らは師の助言に感謝し、贈り物を送った。

緒方の教え子の一人である坪井次郎も1892年(明治25)にペッテンコーフェルの許にやって来た。坪井はいわばペッテンコーフェルの孫弟子に当たる。坪井は日本で足尾銅山の鉍毒事件に熱心に取り組んだ人だが、ミュンヘンでも「ミュンヘン市の若干の建物における自然的の換気装置に関する研究」(Untersuchungen über die natürliche Ventilation in einigen Gebäuden von München)を書き、ペッテンコーフェル学位取得50周年記念祭に敬意を表して衛生学アルヒーフ誌第17巻(1893)に発表した。若い坪井はペッテンコーフェル夫妻からしばしば彼らの別荘に招待されたという。

緒方正規を始めとする日本人医学生のペッテンコーフェル宛の書簡から分かるのは、彼らのドイツとの結びつきの深さであり、彼らの留学時代の研究に日本は多くを負っているということである。

従来日本ではペッテンコーフェルは鷗外との関連で取り上げられることが多かったが、それだけでなく緒方その他の医学者の眼を通したペッテンコーフェル像も興味深い。

## 鍋島家派遣ドイツ留学生 牧亮四郎

1880年(明治13)旧佐賀藩鍋島侯の給費生として三人が選ばれドイツに留学した。即ち佐野常民の子息常実(法律学)、牧亮四郎(医学)、藤山治一(農学)である。

佐野常実はイエーナ大学に留学したが、同年8月急病に罹ったため、ベルリンにいた藤山治